

立命館守山高等学校硬式野球部のコンセプト  
(リツモリらしい野球部へ『innovative baseball』宣言)

1. 高校野球 200年 新世紀型の野球部で価値ある勝利を目指す

1915年(大正4年)大阪豊中球場で「全国中等学校優勝野球大会」として産声を上げてから、今年で100年。高校野球の全国大会はこれまで春夏合わせて5000もの熱戦が繰り広げられてきました。あらん限りの力で勝負を挑むエース。己のすべてをかけて立ち向かう打者。マウンドからホームプレートめがけて放たれた白球は、この100年で100万球。その一つ一つに、人々の思いが乗り移り、幾多の物語を生んできました。それは、ふるさとや青春、そして時代の記憶と結びつき、スポーツの枠を超え、私たちの心に深く根ざす共有財産となっています。ともに戦い、ともに笑い、ともに涙した、100年。高校野球が大きな節目を迎えた2015年。  
(2015 NHK ON LINE 『高校野球100年の物語』より抜粋)

## ◇ Our Vision

2016年、高校野球は2世紀目を迎える。立命館守山高校は記念すべきこの年に日本高等学校野球連盟4031番目のチームとして加盟する。「fight friendship fair play」の旗の下、常に勝利を追求し幾多のドラマを生んだ感動の舞台「甲子園」を目指す。戦争による断絶を乗り越え、脈々と受け継がれてきた100年の歴史に敬意を払い、その歴史を継承し、次の100年の主役となるにふさわしいチームになることがわれわれの目標である。

## ◇ Our Mission innovation—resilience—diversity

- ① 立命館守山野球部は日本のスポーツの概念を打ち破る新しい挑戦をする。
  - ・国内において野球は競技スポーツ・生涯スポーツまた娯楽として、余暇の多様化が進んだ今も強い影響力・発信力をもっている。すなわち野球界が変われば、スポーツ界が変わる。われわれは高校野球に新たなアプローチを試み、勝利をもって証明し、日本のスポーツ界に変革の波を起こす起爆剤となることを目指す。
- ② 立命館守山野球部は、野球のさらなる普及、グローバル化に挑戦する。
  - ・世界的には五輪の正式競技から外れるなど、野球をメジャースポーツとしている地域は少ない。われわれは野球を愛する者として、取り組みのすべてを通して、このスポーツの素晴らしさを一人でも多くの人々に伝えることをミッションとする。とりわけアジアの中国・インドへの普及拡大を目指す。クラブの修了者は生涯野球のエヴァンジェリストである。

## ◇われわれの目的

われわれは、以下の3つの要素を養う準備をする。このたゆまぬ準備の過程が将来社会に貢献する人材の育成に通じることを確信するものである。

- ① 「闘志」 胆力を養う 失敗を恐れない胆力 resilience

野球は不確定要素の大きい「失敗」のスポーツである。失敗を恐れていては勝利をつかむことはできない。「1974年メジャーリーグではルー・ブロックが118回の盗塁を成功させ、当時の世界記録を樹立した。

しかし、この年の盗塁失敗33回も同時に世界記録であった。」

打撃においても成功の証は「3割」である。スイングなくして快打なし。結果を恐れず、勇気をもって果敢に挑む「胆力」すなわち「闘志」が選手の第一条件である。

◇「知力」 野球における状況判断力を養う 敵を知り己を知るものだけが勝利をつかむ

12通りのボールカウント。3つのベースを埋める走者の組み合わせが8パターン。これに3つのアウトカウントを加え288通りのシチュエーションが存在する。さらに投手と打者の左右の組み合わせ、点差、イニング、グラウンドコンディション、天候等の要素を掛け合わせれば数万通りの攻守のパターンがある。その中から一瞬で適切な行動を選択し、肉体をコントロールしなければ勝利を手に入れることはできない。

「観察して 感じて 勘を働かせる」スタジアムでは左脳と右脳のフル回転が勝利への鍵となる。

また、人が人を送り、迎え入れる「人」が得点になるスポーツであり、塁上の走者は自らの意志と判断をもって果敢にHOMEにRUNしなければならない。血気にはやる「闘志」だけでは好選手ではない。勝利のための「知力」すなわち「判断力」は必須条件であり、基本的な知識・思考力・冷静な判断力のない人物は好選手足り得ず、チームの勝利に貢献することは不可能なのである。よって「知力」が選手の第2条件である。

◇個人の技量を上回るチーム力という要素

チーム力においてもこの不確定要素は大きい。最高峰のNPBでも1973年のペナントでは優勝した巨人の勝率が.524。この年最下位の広島は.472。両者の差はわずか6.5ゲームであった。優勝チームでも全勝するわけではなく、強者が常に勝利するとは限らない。まして人間形成の途上にある高校生の一本勝負では、勝敗の行方は一定のレベルのチーム力をもってすれば、予想をつけることは困難である。

われわれはこれまでの常識から考えれば、決して恵まれた環境を有しているわけではないが、野球学を通して「知力」「胆力」「チーム力」を一歩でも前進させ、来るべき決戦の時に備える。われわれは少年野球の心（好奇心）で、大学生の知力（アカデミズム・探究心）を獲得し、社会人野球のスキル（ストラテジー・テクニク）を目指してチーム力を向上させる。

◇われわれの考える「野球を通じた人間形成」 outoput 1<sup>st</sup> input 2<sup>nd</sup>

中等教育のすべての学習要素を集約し、自らの頭脳と肉体を通して野球のフィールドで演習を行う。困難な状況を克服し、常識や慣例の壁を突破し、創意工夫で問題を発見、課題を克服し目標を達成する。

さらに高等教育の場で野球を素材に修得した内容から自身の関心に従い、多様な学部へ進み、学園の中核的存在としてさらに高度な応用問題に挑戦し、社会に貢献する創造的人材「Game Changer」を育成する。

◇サイエンスマインド SSHとして

野球界にないもの「学校体育としての理論」「指導者・審判員としてのライセンス制度」「全競技階層の統一的組織」⇒従来の方法論とりわけ経験論と精神論を吟味しながら、科学的アプローチを総合学園の強みを最大限活用し追求する。

◇グローバルマインド

甲子園大会での活躍は競技者として最大の目標ではあるが、最終の目的ではない。短期的な視点や閉じた高校野球観にとらわれず、野球を人生を切り拓く、世界とつながるツールとなるように取り組む。

◇タイムマネジメントの習得

グラウンドでの練習量だけに依拠しない方法で甲子園を目指す タイムマネジメントの習得。

オンザグラウンドとオフザグラウンドを区別しない「文武融合」型スキルアップを目指す

休息・睡眠・食事も含めた24時間×千日間の実践・理論を通じた「野球漬け」である。

## 2. 取り組みのアイデア Innovative baseball

①サイエンスマインドの育成 立守らしさの追及 常識を疑う科学的精神の涵養

(1) デジタルトランスフォーメーション ICT活用の推進

- ・個別最適化練習の導入。練習ログ。ポートフォリオ 野球日誌のデジタル化。
- ・タブレット端末を利用したコーチング・動作解析・戦略的データ分析

- ・集大成としての卒業研究・論文、野球アカデミーとしてのコンベンション開催
- (2) 食育の取り組みへの参画 (高大連携 地域連携 スポーツ健康科学部 研究調査協力)
  - ・全農との3年コラボレーション JA おうみ富士より近江米の提供。
  - ・セルフコントロールと基本的栄養学知識の習得

②グローバルマインドの育成 国際交流:多文化理解・語学の習得・実践の機会(他競技の先進事例を参考に)

- ・付属校研修 スペインサッカー事情を例に(世界のスペインサッカーは週10時間しか練習しない)
- (1) フロリダ IMG アカデミーでの 野球の母国アメリカでの研修(2017年実施)
- (2) スリランカとのスポーツ交流 定期戦・ナショナルチーム・国際協力
  - 世界への野球の普及 (APU 関係者 OB 審判員スジワさん・モンテ・カセム教授)
  - ・甲子園出場の暁には外国人記者クラブで生徒自ら英語での記者会見に応答する。

③立命館大学のリソースを活用し、目標に到達しているトップレベルを知る

- (1) 立命館大学硬式野球部との高度な連携(ソフト・ハード両面)
- (2) 高校野球100年に学ぶ 「勝者のメンタリティ・組織運営」全国の名門校への遠征
  - ・年間30泊程度の遠征合宿を通じて、全国制覇を経験した強豪校に学ぶ。
  - ・北海道、関東、東海、中国、四国、九州 学園施設、OB指導者人的ネットワークを活用し、全国へ。

④地域に根差し、愛されるチーム作り

- (1) 通学圏内生のみのチームビルディング。
- (2) 地域との連携 全農(JA おうみ富士)・立命館大学スポーツ健康科学部研究室との食育連携事業
  - ・援農事業(玉ねぎ植栽ほか) 琵琶湖環境整備 少年野球アカデミーの開催
  - ・守山市および守山市文化体育振興事業団との連携の高度化。

3. 修得すべき7つの分野と8つの力

- |              |           |
|--------------|-----------|
| (1) 野球の歴史と現状 | (1) 目標設定  |
| (2) 練習の方法    | (2) 課題発見力 |
| (3) 戦術への理解   | (3) 計画性   |
| (4) ルールの習熟   | (4) 実行力   |
| (5) 組織マネジメント | (5) 情報収集力 |
| (6) 科学的思考法   | (6) 継続性   |
| (7) 語学力と国際感覚 | (7) 情報発信力 |
|              | (8) 協調性   |

4. 期待される進路例

- (1) 競技を究める(AMC) ⇒立命館大学野球部⇒プロ野球・社会人野球へ
- (2) 野球学を究める(FSC) ⇒東大・京大・筑波大⇒研究者
- (3) トレーニング・栄養学を究める⇒スポーツ健康科学部・情報理工学部⇒指導者・研究者
- (4) サプリメントの開発等、医療健康を究める⇒薬学部・食マネジメント学部⇒研究者
- (5) 組織マネジメントを究める⇒経営学部・産業社会学部⇒プロスポーツ企業の運営
- (6) スポーツの感動を伝える⇒文学部・産業社会学部・映像学部⇒マスコミ
- (7) スポーツを通じた地域貢献を考える⇒政策科学部⇒地域スポーツ振興

(8) 国際貢献の在り方を考える・実践する⇒国際関係学部・APU⇒スポーツ庁・外務省・海外青年協力隊  
参考資料

## I 立命館憲章 THE RITSUMEIKAN CHARTER

立命館は、西園寺公望を学祖とし、1900年、中川小十郎によって京都法政学校として創設された。「立命」の名は、『孟子』の「尽心章句」に由来し、立命館は「学問を通じて、自らの人生を切り拓く修養の場」を意味する。立命館は、建学の精神を「自由と清新」とし、第2次世界大戦後、戦争の痛苦の体験を踏まえて、教学理念を「平和と民主主義」とした。立命館は、時代と社会に真摯に向き合い、自主性を貫き、幾多の困難を乗り越えながら、広く内外の協力と支援を得て私立総合学園への道を歩んできた。立命館は、アジア太平洋地域に位置する日本の学園として、歴史を誠実に見つけ、国際相互理解を通じた多文化共生の学園を確立する。立命館は、教育・研究および文化・スポーツ活動を通じて信頼と連帯を育み、地域に根ざし、国際社会に開かれた学園づくりを進める。

立命館は、学園運営にあたって、私立の学園であることの特性を活かし、自主、民主、公正、公開、非暴力の原則を貫き、教職員と学生の参加、校友と父母の協力のもとに、社会連携を強め、学園の発展に努める。立命館は、人類の未来を切り拓くために、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類的諸課題の解明に邁進する。その教育にあたっては、建学の精神と教学理念に基づき、「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努める。立命館は、この憲章の本旨を踏まえ、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する。

2006年7月21日 学校法人 立命館

## II 立命館スポーツ宣言

立命館は、スポーツを人類共通の文化としてその意義と価値を享受することが、個人の幸福と、社会の平和と繁栄にとって不可欠なものであると考え、「立命館憲章」に基づきスポーツを学園づくりのための重要な要素として位置付ける。

立命館は、多様な学びの機会の創造という観点から、スポーツを児童・生徒・学生の「学びと成長の場」と見なし、スポーツの振興と発展に努めてきた。時代の変化に対応し、これまで以上に社会の要請に応えることができる人材を育成するとともに、スポーツの持つ力と役割を改めて学内外に示すことを目的とし、ここに立命館スポーツ宣言を定める。立命館は、建学の精神と教学理念に基づき、高い水準で、スポーツの振興と発展を担い「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもった人間の育成に努める。立命館は、学祖西園寺公望の「自由主義と国際主義」の精神を受け継ぎ、スポーツの持つ力が言葉や文化、さらには民族、国境を越えた相互理解の手段となると考え、スポーツを通じて、自由にして進取の気風に富んだ国際平和と国際交流に寄与することのできる地球市民の育成に努める。立命館は、私立の総合学園として、その教育課程においてスポーツをとおした全人教育を実践するとともに、クラブ・サークルをはじめとした課外自主活動の振興・発展と環境整備に努める。

立命館は、障がいの有無に関わらず、すべての学園構成員に、スポーツに参加する基本的権利を尊重すると共に、スポーツを日常生活に根付かせ、心身ともに健康な暮らしのために生涯にわたってスポーツに親しむことを奨励する。立命館は、スポーツの文化価値とその教育における意義を深く認識し、スポーツに関する諸分野での教育・研究を高い水準で推進し、わが国のスポーツの振興・発展をリードする存在となるよう努める。

立命館は、スポーツが学園の理念を具現化する力を持ち、校友・父母を含む学園関係者が一体となることに貢献し、学園の発展を促す重要な原動力となると考え、この振興と発展に努める。立命館は、スポーツを通じて、老若男女を越えた地域コミュニティの形成と発展に携わり、地域社会の健康で豊かなコミュニティづくりに貢献することを社会的役割の一つとする。

2014年4月9日 学校法人立命館

### Ⅲ 立命館大学 学生アスリートの誓い（別紙）

立命館大学体育会は、立命館大学学生を代表するスポーツ団体であり、所属する体育会各部の和のもと、学生スポーツのあり方を追求しています。私たちは、「学業」と「スポーツ」の双方を通じて、主体的に学び、成長する人間になるため、目指すべき姿を「立命館大学学生アスリートの誓い」として、以下に掲げます。

私たちは、学生アスリートとして、学業とスポーツの両立に努めます。

私たちは、礼節を重んじ、応援・支援して下さる方々への感謝の念を持ち続けます。

私たちは、立命館大学の学生及び体育会各部の部員としての誇りと自覚を持ち、常に全学の模範となるように努めます。

私たちは、チームごとに高い目標を掲げその目標の実現に向けて、不断の努力を重ねます。

私たちは、知・徳・体をバランスよく身に付け、「自ら考え、自ら行動する力」を身に付けます。

私たちは、非暴力の原則を貫き、ルールを遵守しフェアプレイの精神を備えた人間になることを目指します。

私たちは、スポーツの振興と地域スポーツの発展のため、地域・社会との連携に取り組みます。

私たちは、スポーツによる国際交流に積極的に参加することに努めます。

2014年2月25日立命館大学体育会

参考：日本学生野球憲章

国民が等しく教育を受ける権利をもつことは憲法が保障するところであり、学生野球は、この権利を実現すべき学校教育の一環として位置づけられる。この意味で、学生野球は経済的な対価を求めず、心と身体を鍛える場である。学生野球は、各校がそれぞれの教育理念に立つて行う教育活動の一環として展開されることを基礎として、他校との試合や大会への参加等の交流を通じて、一層普遍的な教育的意味をもつものとなる。学生野球は、地域的組織および全国規模の組織を結成して、このような交流の枠組みを作り上げてきた。

本憲章は、昭和21（1946）年の制定以来、その時々新しい諸問題に対応すべく6回の改正を経て来たが、その間、前文は一貫して制定時の姿を維持してきた。それは、この前文が、「学生たることの自覚を基礎とし、学生たることを忘れてはわれらの学生野球は成り立ち得ない。勤勉と規律とはつねにわれらと共にあり、怠惰と放縦とに対しては不断に警戒されなければならない。元来野球はスポーツとしてそれ自身意味と価値を持つであろう。しかし学生野球としてはそれに止まらず試合を通じてフェアの精神を体得する事、幸運にも驕らず悲運にも屈せぬ明朗強靱な情意を涵養する事、いかなる艱難をも凌ぎうる強靱な身体を鍛練する事、これこそ実にわれらの野球を導く理念でなければならない」と、全く正しい思想を表明するものであったことに負うものである。

しかし今日の学生野球がこうした精神の次元を超えた性質の諸問題に直面していることは明らかであり、今回憲章の全面的見直し求められた所以もここにある。このような状況に対処するには、これまでの前文の理念を引き継ぎつつも、上述のように、学生野球の枠組みを学生の「教育を受ける権利」の問題として明確に捉えなおさなければならない。本憲章はこうした認識を前提に、学生野球のあり方に関する一般的な諸原則を必要な限度で掲げて、諸関係者・諸団体の共通理解にしようとするものである。

もちろん、ここに盛られたルールのすべてが永久不変のものとは限らない。しかし学生の「教育を受ける権利」を前提とする「教育の一環としての学生野球」という基本的理解に即して作られた憲章の本質的構成部分は、学生野球関係者はもちろん、我が国社会全体からも支持され続けるであろう。（抜粋）

行くぞ甲子園。